

川村学園女子大学 カリキュラム・ポリシー「教育課程編成・実施の方針」

川村学園女子大学 カリキュラム・ポリシー

川村学園女子大学では、建学の精神に基づき、自覚ある女性として社会に奉仕できる教養人を養成するため、文学部、教育学部、生活創造学部を置く。各学部は以下のような方針に基づいてカリキュラムを編成する。

1. 広範で多様な教養教育、幅広い職業人養成を目的としてすべての学生が履修する全学共通カリキュラムを導入し、さらに高度の学問研究の場を提供するため、各学部は学年進行に合わせて、専門科目を体系的に配置する。
2. 各学科は専門分野の知識および方法論を習得し得るよう、初年次段階から学年進行に合わせて、専門科目を体系的に配置する。大学における学修の集大成として、卒業論文・卒業研究を全学必修とし、指導教員制のもとに丁寧な個別指導を行う。
3. 全学共通カリキュラムでは、初年次教育として、自立的な学習スキルの養成を目標とする「基礎ゼミナール」、建学の精神の周知を目指す「総合講座」を配置し、豊かで時代に即した教養の修得をはかるために共通教育科目を多様に設定する。
4. 学部学科の専門分野を超え、幅広く関心ある科目を履修して学際的な視点を養うことを奨励するため、所属学科の専攻のほかに「副専攻」の履修プランを用意するとともに、「クロスオーバー学習制度」を導入する。
5. 学生各自の個性に基づいて自己を確立し、それをいかに社会に生かすかを考えさせ、職業人としての基礎力を養成するため、初年次からキャリア・プランニング科目を設定する。
6. 初年次の基礎ゼミナールから卒業論文・卒業研究の研究指導に至るまで、少人数教育を徹底し、学生の特質に応じたきめ細かい指導を行う。

文学部 カリキュラム・ポリシー

【教育課程の編成】

文学部は国際英語学科、史学科、心理学科、日本文化学科を設置し、各学科が全学共通科目と学科専門科目を体系的に配置する。

【学修方法・学修過程】

全学共通カリキュラムによる教養教育と職業人教育に加えて、各学科の専門科目を初年次から履修可能とする。学年進行とともに、順次性のある専門的な科目を配置し、卒業論文を必修とする。少人数のゼミナールを低年次から高年次まで導入する。各学科のカリキュラム・ポリシーに沿って、実習科目を中心とするアクティブラーニングによって体験的、主体的に学修を行う。取得単位数の上限を設定し（CAP制）、学生の学修を支援する。

【学修成果の評価の在り方】

GPAによる成績評価を運用し、適切な評価を行う。各学生の学修の展開と成果を学修ポートフォリオによって評価する。実習の記録などを通じて、学生の主体的な学修と協働の態度を養い、評価する。ルーブリックにより、基礎的な学力、思考力、主体的な協働を評価する。

教育学部 カリキュラム・ポリシー

【教育課程の編成】

教育学部は幼児教育学科、児童教育学科を設置し、各学科が全学共通科目と学科専門科目を体系的に配置する。

【学修方法・学修過程】

全学共通カリキュラムによる教養教育と職業人教育に加えて、各学科の専門科目を初年次から履修可能とする。学年進行とともに、順次性のある専門的な科目を配置し、卒業研究を必修とする。少人数のゼミナールを低年次から高年次まで導入する。各学科のカリキュラム・ポリシーに沿って、実習科目を中心とするアクティブラーニングによって体験的、主体的に学修を行う。資格取得を踏まえた取得単位数の上限を設定し（CAP制）、学生の学修を支援する。

【学修成果の評価の在り方】

GPAによる成績評価を運用し、適切な評価を行う。各学生の学修の展開と成果を学修ポートフォリオによって評価する。実習の記録などを通じて、学生の主体的な学修と協働の態度を養い、評価する。ルーブリックにより、基礎的な学力、思考力、主体的な協働を評価する。

生活創造学部 カリキュラム・ポリシー

【教育課程の編成】

生活創造学部は生活文化学科、観光文化学科を設置し、各学科が全学共通科目と学科専門科目を体系的に配置する。

【学修方法・学修過程】

全学共通カリキュラムによる教養教育と職業人教育に加えて、各学科の専門科目を初年次から履修可能とする。学年進行とともに、順次性のある専門的な科目を配置し、卒業研究を必修とする。少人数のゼミナールを低年次から高年次まで導入する。各学科のカリキュラム・ポリシーに沿って、実習科目を中心とするアクティブラーニングによって体験的、主体的に学修を行う。取得単位数の上限を設定し（CAP制）、学生の学修を支援する。

【学修成果の評価の在り方】

GPAによる成績評価を運用し、適切な評価を行う。各学生の学修の展開と成果を学修ポートフォリオによって評価する。実習の記録などを通じて、学生の主体的な学修と協働の態度を養い、評価する。ルーブリックにより、基礎的な学力、思考力、主体的な協働を評価する。

国際英語学科 カリキュラム・ポリシー

【教育課程の編成】

国際英語学科のカリキュラムは「実践的英語力」（言語的理解と表現）、「コミュニケーション力」、「異文化を理解する力」（専門知識 方法的理解 分析と思考力 協働）、「国際社会で活動する力」（専門知識 主体性 協働 社会規範）の4本の柱で構成されている。それぞれの柱において1年次から4年次まで段階的に知識とスキルを身につけ、またそれぞれの柱で学んだことを相互にリンクさせることによって内容理解の豊饒を目指す。

【学修方法・学修過程】

1. 専門教育

カリキュラムのそれぞれの柱において、年次ごとに段階的に求められる資質・能力を身につける。

①実践的英語力

音声学、文法、またリーディング・リスニング・ライティング・スピーキングの4技能について、1年次から4年次まで段階的に学ぶ。「TOEIC対策講座」、「TOEFL対策講座」など英語検定対策の科目も履修することができる。

②コミュニケーション力

1年次の「基礎ゼミナール」と2年次の「コミュニケーション基礎演習」で、自ら問題を設定し、情報を集めて整理し、自分の意見を構築し、効果的にプレゼンテーションするスキルを身につける。また1年次から3年次までの「EIA」シリーズにおいて、ネイティブ・スピーカー教員によるコミュニケーション重視の英語学習を行う。

③異文化を理解する力

1年次の「アメリカ文化史」「言語学入門」などの基礎科目、2年次の「国際文化演習」「言語学演習」や3年次以降の「国際文化特講」「言語コミュニケーション特講」などの専門科目において、世界各地の社会や言語・文化について学ぶ。グループでリサーチを行い、プレゼンテーションするグループワークを重視する。

④国際社会で活動する力

1年次の「国際関係入門」、2年次の「国際コミュニケーション演習」、3年次以降の「国際コミュニケーション特講」などによって、国際情勢、国際社会への視野を広げ、海外に文化発信する活動を行う。

⑤学修の集大成として、4年次で卒業研究を執筆する。3年次の「セミナー」から4年次の卒業研究へと続くゼミ指導によってアカデミックな研究の方法論を学び、研究対象とする分野について専門的な知識を身につける。

2. キャリア教育

①TOEIC I P（学内テスト）を年2回実施するとともに年2回の公開テストの受検を義務づけ、そのスコアにもとづいて個別指導を行う。それにより就職活動で重視されるTOEICのスコアを向上させる。

②「国際コミュニケーション演習（3）」（通訳入門）、「国際コミュニケーション演習（4）」（翻訳入門）、「キャリア・イングリッシュⅠ」（通訳トレーニング）、「キャリア・イングリッシュⅡ」（翻訳トレーニング）などの科目で、実務経験をもつ教員の指導のもとキャリアに直結する実践的な学習を行う。

3. 学生への教育支援

①学生一人ひとりにつき専任教員のみが閲覧可能な「学生カルテ」を作成し、プレイメントテストやTOEICのスコア、単位取得状況、交友関係、担任による面談の結果などを記入することにより、教員間で学生についての情報を共有し、個々の学生の状況に合わせたきめ細かな指導を可能としている。

②学修ポートフォリオにより学生に自分の学修状況を振り返らせ、また担任やゼミ担当教員が学生の記入内容にコメントやアドバイスを返すことによって学生の自覚を促し、学修意欲を高める。

【特色ある教育】

1. 第2外国語

第2外国語を必修としており、フランス語、スペイン語、中国語、韓国語のいずれかについて1年次の「基礎」および2年次の「会話」を履修する。

2. 留学制度

海外の高等教育機関との留学提携により長期留学を実現し、また短期語学研修とインターンシップを行っている。1・2年次の「インターナショナル・プログラム」では留学に必要なIELTSの受験対策を実施する。

3. 外国人助教

専任の外国人助教がキャンパスに常駐し、授業を担当するとともに、学生が日常的に外国人と英語でコミュニケーションをとれる環境を作っている。IELTSなど英語検定試験の英語面接指導も行う。

4. 教職課程

中学校・高等学校の英語教員免許および児童英語指導員資格を取得できる。教員採用試験対策講座を課外で行っている。

【学修成果の評価の在り方】

1. 評価方法

- ・GPAによる成績評価を運用し、適切な評価を行う。
- ・各学生の学修の展開と成果を学修ポートフォリオによって評価する。
- ・実習の記録などを通じて、学生の主体的な学修と協働の態度を養い、評価する。
- ・ルーブリックにより、基礎的な学力、思考力、主体的な協働を評価する。

2. 評価項目

- (1) 英語運用能力とコミュニケーションスキル
- (2) 世界の諸地域の社会・言語・文化に関する理解
- (3) 国際情勢への理解と、情報収集・発信能力

史学科 カリキュラム・ポリシー

【教育課程の編成】

史学科のカリキュラムは「人間社会を理解する力」（幅広い理解・歴史学の専門知識・方法の理解）、「読解力を高め問題発見する力」（言語的理解と表現）、「分析して思考し解決する力」、「感性を磨き社会に貢献する力」（主体性 協働）、「「自覚ある女性」として活躍する力」（主体性 協働 社会規範）の5本の柱で構成されている。

そして、初年次から学年進行に合わせ、全学共通科目と学科専門科目を体系的に配置する。専門科目は歴史学の新しい方法や視点を取り入れ、多くの選択科目を設けて幅広い教養と深い学識が習得できるように配慮する。

【学修方法・学修過程】

1. 全学共通カリキュラムによる教養教育と職業人教育に加えて、史学科の専門科目を初年次から履修可能とする。専門科目は、学年進行に従い順次性をもって科目を配置し、日本史・アジア史・西洋史の各専門領域の科目が履修できるようにする。
2. 初年次においては、基礎ゼミナールにおいて、大学における学修に必要なリーディング・ライティングの基本的なスキルを教授する。また、研究入門科目において、日本史・アジア史・西洋史の各専門領域の知識や方法論の基礎を身につける。
3. 少人数の演習科目を1年次から4年次まで全年次で導入し、学年ごとに必修または選択必修とする。これらを中心にアクティブラーニングを導入した科目を多数設け、体験的・主体的に学修を行う。
4. 4年次において、教員の指導のもと、卒業論文を作成し提出することを必修とする。
5. キャリア・プランニング科目の履修をサポートするなど、学生の就職に向けた支援を行う。
6. 初年次より学修ポートフォリオを作成する。各学生が自ら記入することで自己啓発能力を高めるとともに、内容について教員が指導することで学修の改善を目指す。

【特色ある教育】

1. 歴史学地理学の各分野における基礎知識ならびに方法論を身につけるため、2学年にわたって日本史・アジア史・西洋史・地理の概論にあたる科目全てを履修する。
2. 歴史学の修得に必要な外国語に習熟し異文化を理解するため、2学年にわたって英語ならびに第2外国語を履修する。
3. 2年次に現代日本語以外の文献（古文・漢文、欧文など）の講読を履修し、レポートや卒論で史料を利用する能力を育む。
4. 時代・地域にとらわれないテーマ史の講義を多数開講し、歴史学を研究する上での多様な視点や新しい視座を提供する。
5. 高等学校・中学校教員や司書・学芸員などの資格取得を希望する学生に対する体制を整備し、支援する。

【学修成果の評価の在り方】

1. GPAによる成績評価を運用し、適切な評価を行う。
2. 各学生の学修の展開と成果を学修ポートフォリオによって評価する。
3. 演習の記録などを通じて、学生の主体的な学修と協働の態度を養い、評価する。
4. ルーブリックにより、基礎的な学力、思考力、主体的な協働を評価する。

心理学科 カリキュラム・ポリシー

【教育課程の編成】

心理学科は、人々の心に科学的にアプローチするための知識および方法論を習得し得るよう、学年進行に合わせて、講義、演習、実験・実習科目を体系的に配置している。授業科目は、心理学一般とアプローチを理解する基礎的科目を共通基盤として、科学的思考を備えたコミュニケーション能力を育む認知・社会心理学系科目と、心理的支援力を身につける発達・臨床心理学系科目と、自覚ある女性を目指す科目で編成されている。この3つの柱を学ぶことで、学生が身につける資質・能力が育まれるように組み立てられている。

【学修方法・学修過程】

1. 初年次教育

1年次には、「基礎ゼミナール」において、大学における学び方の基礎を理解する。また、「心理学概論」で心理学の成り立ちや領域を理解し、「心理学統計法（基礎）」で心を科学的に捉えるアプローチの準備をする。さらに、心理支援に関わる現場を体験的に学ぶ「心理実習（入門）」では、自分に合った今後の学修法への理解を深める。

2. 専門教育

2年次で「心理学実験（基礎）」を学び、心理学的に調べ・分析し・考え・報告する力を培う。3年次以降は、認知・社会心理学系科目および発達・臨床心理学系科目における理論と技法を学べるよう、講義のみならず実験や実習を交え、アクティブラーニングを行う。4年次では、主体的に自分の探求テーマを定め、「卒業論文」にまとめる。

3. キャリア教育

「自覚ある女性」の理念を実体化するために、心理学の知見を元に自分の個性を適切に認識し、自分らしい社会参加ができるよう支援する。心理学系の専門資格として、認知・社会心理学系では社会調査のエキスパートである「社会調査士」を、発達・臨床系では心理支援の国家資格である「公認心理師」受験資格の取得をサポートする。

4. 学生への教育支援

「実験」「調査」では情報処理を円滑に行うために、情報機器や実験教材を多数用意する。また体験・実践的な学びを深められるよう、「実習」「演習」科目ではグループ活動を含めたアクティブラーニングを積極的に取り入れる。また「社会調査士」「公認心理師」資格や大学院に対して情報提供をし、説明会や個別サポートを行う。

【特色ある教育】

認知・社会心理学系では、実験やアンケートなど、科学的な手法で社会の課題やニーズを捉えるスキルを磨く。発達・臨床系では、心理検査やカウンセリングなど、個人の個性や課題を支援的に捉える力を培う。また、「心理学特殊講義」では、先端的で特色あるさまざまな心理学テーマを取り上げ、今日的な学びを進める。

【学修成果の評価の在り方】

GPAによる成績評価を運用する。各学生に対しては、ルーブリックにより学修の展開や蓄積を可視化しつつ、基礎的な学力、思考力、主体的な協働を以下の観点で評価する。

- ・認知・社会系および発達・臨床系科目に関する知識技能を理解・修得しているか。
- ・心理学に関わる諸情報を適切に処理分析し、判断して、表現する力が身についたか。
- ・心理学的な課題に主体的、協働的に取り組む姿勢と技能を修得しているか。

日本文化学科 カリキュラム・ポリシー

【教育課程の編成】

日本文化学科のカリキュラムは、日本文学・日本語学系（「日本語で表現する力」）、日本美術・伝統芸能・民俗系（「感性を働かせ創造する力」）の二つの柱で構成している。この2つの柱を学ぶことで、学生が身につける資質・能力が育まれるように組み立てられている。

【学修方法・学修過程】

1. 日本文化に関わる必修科目、各分野の基礎的な教養科目、高度な専門性を持つ科目、資格取得に必要な科目、実技科目を学年の進行に沿って配置している。
2. 初年次・2年次においては、基本的な学習方法論を修得するため、日本文化に関わる科目を中心に、講義ノートの取り方、文献収集の方法、プレゼンテーションの方法とレジメの作り方を学ぶ。
3. 3年次では、日本文化への理解をより深めるため、2つの専門領域の中から演習科目を2つ履修し、学生が主体的に調査・研究を行い、その成果についてのプレゼンテーションを行う場を設けている。
4. 最終年次では、学修の集大成として卒業論文・卒業研究の作成を行わせる。研究指導では、指導教員制のもとで、学生の特質に応じたきめ細かい指導を行う。
5. キャリア・プランニング科目のサポートを行い、専門性と実践力を身に付けさせる。また、初年次より学修ポートフォリオを作成し、自己啓発能力を高めるとともに、社会人としての基礎力を養成する。

【特色ある教育】

1. 学科では繊細でしなやかな感性を養うために、日本の伝統文化を体験できる実技科目（書道、日本舞踊、茶道、華道、日本画、能の仕舞・謡い）を設置している。
2. 資格取得に必要な科目では、中学校・高等学校国語科教員、日本語教員、並びにクロスオーバー学習制度で取得可能な博物館学芸員、図書館司書の資格も含め、各資格に関わる基礎から専門までの幅広い知識を、理論と実習を通して身に付けられるよう指導する。

【学修成果の評価の在り方】

1. GPAによる成績評価を運用し、適切な評価を行う。
2. 各学生の学修の展開と成果を学習ポートフォリオによって評価する。
3. 実習の記録などを通じて、学生の主体的な学修と協働の態度を養い、評価する。
4. ルーブリックにより、基礎的な学力、思考力、主体的な協働を評価する。

幼児教育学科 カリキュラム・ポリシー

【教育課程の編成】

幼児教育学科では ①教育・保育に関する専門的な技能、②乳幼児の心身の発達に関する理解、③表現力の習得、④問題発見・解決力の育成、⑤使命の自覚と社会奉仕の精神の育成、の「5つの養成する力」の方針に基づいて学科専門科目を体系的に配置しカリキュラムを編成する。この5つの柱を学ぶことで、学生が身につける資質・能力が育まれるように組み立てられている。

【学修方法・学修過程】

1. 全学共通カリキュラムに加えて幼保連動カリキュラムで1年次より保育者として必要な基礎知識と技術を、体験を通して身に付ける。
2. 研究やディスカッションを実践的に積みあげる参加型の少人数授業を実施する。1年次で基礎を学び、2年次に応用、3年次からゼミナールに所属する。
3. 専門性の幅を広げるために、保育者に必要とされる多様な技能、技術を身に付け、実践できるよう幅広い演習科目を配置し、現場実習でアクティブラーニングの学修効果を総合的に活用できるように丁寧な指導を実践する。
4. 幼児教育に関する課題だけではなく、広い視野を持って様々な課題を自ら設定し、必要な情報収集・選択と活用を通じて自らの疑問や課題を探求し、解決するための能力を養うために4年次に卒業研究を設定する。
5. 学修ポートフォリオ、保育・教職実践演習カルテなどを作成し、自らを振り返り次の課題に向けて主体的に高めていく。

【特色ある教育】

1. 「幼児教育体験学習」で1年次より演習形式で多様なくひと・もの・こと>に出会うことにより保育者としての資質の基盤を形成する。
2. 幼稚園教諭と保育士のカリキュラムを連動させ、両方に必要な乳幼児の心身の発達や保育方法に関する基礎知識と子どもに関わる心構えや態度、音楽・造形・運動・児童文化等の技術を身につけられるよう工夫されている。
3. 現役の保育者を講師に迎え、現場の状況を幅広く学ぶ。また地域・自治体との連携により多様な活動を行い保育の学びを広げる。

【学修成果の評価の在り方】

学修の展開と成果を学修ポートフォリオ、実践演習カルテなどを活用しながら以下の観点で評価し、それを教育課程の改善に生かしていく。

- ・「5つの養成する力」の各専門分野に関する知識・技能を理解、修得しているか。
- ・保育者に必要な知識・技能を修得しているか。
- ・保育の課題に主体的、協働的に取り組む能力を修得しているか。

児童教育学科 カリキュラム・ポリシー

【教育課程の編成】

児童教育学科では、カリキュラムを「教職の専門的知識」「教職の専門的技能」「教育実践力」「課題解決能力」「教職への対策力」の5分野に区分し、系統的に配置する。この5つの柱を学ぶことで、学生が身につける資質・能力が育まれるように組み立てられている。

【学修方法・学修過程】

1. 目指す教師像の具体化に向けて、1年次から小学校訪問を行い「教える立場」への理解と自覚を促す。
2. 教職の専門性を踏まえて、学生一人一人がキャリア・プランを確立する。
3. 小学校教員として要求される深い専門的知識・技能・態度の確実な習得のために、①教育学の基礎的理論科目、②各教科教育法を中心とした教職の専門科目、③教育実習を中心とした実践的・応用的科目を配置する。
4. 学校等の教育関係施設での体験を通して、実践的に学ぶ機会を1年次から4年次まで順次配置する。
5. 少人数制ゼミナールを実施する。1年次ではレポート作成や目的に応じた情報収集の方法、2年次ではプレゼンテーションの方法やグループワークの方法を習得し、3年次では学生の興味に応じたゼミナールに所属するほか、教職専門演習、教職教養演習を開講し、多様なテーマを演習形式で分析、考察する。
6. 4年間の集大成として、個別指導体制のもとに卒業研究に取り組み、その研究成果を発表する。

【特色ある教育】

1. 教職科目のいくつかに複数教員を配置し、学生が授業の中で理論的な側面と児童の指導に密接に関わる実践的な側面の両方の資質を高められるよう工夫を行っている。
2. 「教職専門演習」では、各教科の教員採用対策を目指して、過去の教員採用試験問題から代表例を提示し、各教科に必要な知識の習得とともに、様々な問題に対処できる力を養っている。
3. 往還教育の一環として小学校の現場を参観したり、教育委員会から講師を招き教師としての基本を学んだりする機会を設けている。特に学校参観ではタイプの違う学校を参観し、実際の小学校の違いについて学ぶ機会を多くしている。
4. 3年次では、千葉県教育委員会主催の「ちば！教職たまごプロジェクト」に参加できるように、時間割を工夫して機会を確保している。

【学修成果の評価の在り方】

1. GPAによる成績評価を運用し、適切な評価を行う。
2. 各学生の学修の展開と成果を学修ポートフォリオによって評価する。
3. 実習の記録などを通じて、学生の主体的な学修と協働の態度を養い、評価する。
4. ルーブリックにより、基礎的な学力、思考力、主体的な協働を評価する。

生活文化学科 カリキュラム・ポリシー

【教育課程の編成】

生活文化学科では、多様な社会環境に対応できる社会力と豊かな感性を有する栄養士・栄養教諭・家庭科教諭を養成することを目的として「社会と生活」、「生活と家庭」、「栄養と健康」の3領域の科目を配置する。この3つの領域を学ぶことで、学生が身につける資質・能力が育まれるように組み立てられている。

【学修方法・学修過程】

1. 初年次教育

「基礎ゼミナール」において、講義ノートの取り方や、文献や資料など情報を検索・収集・整理する方法や、レポートの書き方など「学びの基本」について少人数制のゼミナール形式で学ぶ。また、「社会生活入門(1)(2)」、「社会学概論」において、社会の問題を自分の問題として認識できる力を習得し、大学生活へのスムーズな導入を図る。3領域に関連した基礎的・専門的科目を順次性をもって配置し、その後の学びを体系的に学修できるようにする。

2. 専門教育

栄養士・栄養教諭・家庭科教諭に必要な高い専門性を支える基礎・基本を学び、アクティブラーニングや協働学修を取り入れながら体験的・主体的に専門性の充実を目指す。「社会と生活」領域では、変容する社会を理解し、社会との調和を図りながら自分らしいライフデザインを構築できるようにするための科目を配置する。「生活と家庭」領域では、「食」を中心に衣・食・住・家庭分野での生活の質や生活マネジメントを探究する科目を配置する。「栄養と健康」領域では、「食」を拡充し、「食」に関する専門的な技能・能力を有する栄養士養成するための科目を配置する。3年次よりゼミナールを開始し、これを卒業研究へと継続させることで専門性を高める。

3. キャリア教育

「社会への奉仕」、「自覚ある女性」、「感謝の心」の大学理念を具現化するために、地域連携・地産地消などの社会貢献活動や、病院、教育機関、企業、自治体などにおける実践活動を通じて、判断力や実践応用力の向上を目指す。様々な講義、演習時の実技・実験・調査等において、省察力や課題解決能力を養成し、専門性と実践力を養成する。

4. 学生への教育支援

栄養士、栄養教諭、家庭科教諭のほかに、フードスペシャリスト、医療秘書実務士などの資格取得のためのサポートを行う。管理栄養士、家庭料理検定等資格試験に向けた課外講座を実施する。

【特色ある教育】

外食産業・商品開発などフードビジネスや、農業体験・地産地消の学習を通じて、地域連携など社会貢献活動を実践的に行う科目を配置する。

【学修成果の評価の在り方】

生活文化学科では、学修の展開や業績の可視化を図るため、4年間を通じた学習ポートフォリオを活用し、以下の観点で評価し、それを教育課程の改善に生かす。

1. 栄養、食品、調理などの栄養・健康科学、社会と生活、家庭に関する社会科学に関する知識・技能を理解・修得しているか。
2. 栄養士・栄養教諭・家庭科教諭に必要な知識・技能を理解・修得しているか。
3. 栄養、健康や社会生活に関わる課題に主体的・協働的に取り組むことができる能力を修得しているか。
4. ルーブリックにより、基礎的な学力、思考力、主体的な協働を評価する。

観光文化学科 カリキュラム・ポリシー

【教育課程の編成】

観光文化学科のカリキュラムは「論理的思考力」、「国際理解力」、「実践力」、「コミュニケーション力」、資格関連の5つの柱で構成されている。この5つの柱を学ぶことで、学生が身につける資質・能力が育まれるように組み立てられている。

科目は講義、実習、演習形式の授業を適切に組み合わせている。さらに本学科では、能動的な学修の促進のために、多数の実践科目を開講している。

【学修方法・学修過程】

1. 初年次教育

1年次には「基礎ゼミナール」「プレゼミナール」科目を配置する。この科目は、講義ノートの取り方、図表の書き方を含めたレポートの書き方、プレゼンテーションの仕方、文献の探し方、調べ方などの学修のための基礎スキルを学ぶ。また設定したテーマについてグループワークをすることを通して、コミュニケーションスキルの向上を図る。これらの学修を通して、大学生活にスムーズに入れる指導をする。

2. 専門教育

(1) 幅広い知識と論理的思考力

1年次より観光の基礎知識を学び、学年進行とともに観光に関連した文化、ホスピタリティなどの学際的科目を学ぶ。これらの学びを通して幅広い知識と論理的思考力を身につける。

(2) 異文化理解

日本、アジア、アメリカ、ヨーロッパ地域における歴史、地理、文化、社会、言語について学び、異文化を多面的に理解する能力を培う。

(3) 実践力

2年次以降の「観光文化実践」科目を始めとして、フィールドワークとアクティブラーニングを取り入れた科目を配置する。これらの学修を通して、主体性と協働の能力を培う。さらに人々との協働を通して、社会のルールを身につける。

(4) コミュニケーション力

1年次より観光場面などでのコミュニケーションを重視した英語学習を行う。2年次後期からのゼミにおいては自分で問題を発見し、自分で文献や資料を調査し、報告書やレポートを作成する。プレゼンテーション、ディスカッションなどの学修を通して、問題を関連付けて考える力、コミュニケーションスキル、他者との協働を身につける。

(5) 問題解決能力

社会の様々な課題に関心を持ち、自ら課題を設定し、必要な情報を収集・選択・活用し、設定した課題を解決する能力を養うために卒業論文を配置する。

3. 学生へのさまざまな支援

旅行業務取扱管理者（国家資格）、全国通訳案内士（国家資格）、世界遺産検定、東京シティガイド検定、景観検定、フード・アナリスト検定、温泉ソムリエ、温泉観光実践士、温泉観光士、TOEIC、観光英検、マイクロ・ソフト・スペシャリスト（MOS）検定などの資格取得のためのサポートを行う。

【特色ある教育】

1. 実践授業やゲスト講師などの多様な授業形式

「観光文化実践」科目をはじめとして、ホテル・旅館、テーマパークなどの各種観光施設の実際の現場を体験する授業を多く設けている。実践授業は、教室で身につけた知識を基に、現場での経験を通して、自らが主体的に問題に取り組む能力を育む。また各産業界において、現場で実際に仕事をしている方たちをゲスト講師として招聘し、現場の経験を直に聞く機会を多く設けている。ゲスト講師の話聞くことによって、さまざまな産業における仕事の知識だけではなく、学生にとって将来の職業選択の一助となることも期待できる。

2. 資格支援

国家資格である旅行業務取扱管理者、全国通訳案内士、民間資格である世界遺産検定、温泉ソムリエ、温泉観光実践士などの資格支援に積極的に取り組んでいる。これらの資格は、原則として複数の授業科目において対応している。授業では過去の問題などを紹介し資格試験への取り組みの指導を行っている。

3. 産学連携

企業と学生が共通のプロジェクトに取り組む産学連携を積極的に行っている。産学連携では、学生が企業で働く人たちの指導と協力の元に、旅行や結婚式などの企画製作に取り組んでいる。この取り組みによって、基礎から応用までの幅広い知識を身につけることができ、主体的に課題に取り組む能力を培える。

【学修成果の評価の在り方】

1. GPAによる成績評価を運用し、適切な評価を行う。

2. 学修成果の評価方法は、期末試験に加え、理解度を適宜確認するために小テストやレポートを行うことがある。

3. 学生が主体的に学修計画、評価を行うために学修ポートフォリオ等を活用する。

4. 科目ごとの評価はシラバスに明記された方法に沿って行われる。

5. ルーブリックにより、基礎的な学力、思考力、主体的な協働を評価する。

人文科学研究科 心理学専攻

◎カリキュラム・ポリシー

【教育課程編成】

臨床心理学領域：

1. 臨床心理学の基礎を必修とし、実習・スーパーヴィジョンにより心理臨床領域の実践力が身につくようカリキュラムを編成する。

2. 臨床心理学の基礎と実習のみならず、認知、社会、発達など幅広い科目を設置し、心理学全般の高度な知識、理解力を養成する科目を設置する。

3. 多様な現場に対応した即戦力・応用力を身につけられるよう、各種の治療的理論や技法、心理療法を修得するための科目を配置する。

心理行動科学領域：

1. 最新の研究成果を示し、心理学の専門職に求められる高度な知識や分析力を修得できるようカリキュラムを編成する。

2. 認知心理学分野と社会心理学分野を中心に、人間の知的機能や対人関係のメカニズムを深く探究し、主体的に研究を行い得る能力を養成する科目を配置する。

【学修方法・学修過程】

1. 講義科目

臨床心理学領域では問題解決型学習、役割体験学習、課題学習を行う。心理行動科学領域では問題解決型学習、課題学習を行う。教員と院生だけでなく院生同士の討論を行うことによって、学習目的達成および学習内容の理解を深める。

2. 演習科目

課題に取り組むために、文献講読・調査を主に行う。講読・調査内容はレジメを作成するだけでなく内容についてのプレゼンテーションを行う。院生間、院生と教員間で討論を行い、レポート作成によって課題の理解を深める。

3. 実習科目

臨床心理学領域においては、学内の臨床心理相談センターおよび学外の医療・教育・福祉・司法・産業等の多領域にわたる実習協力機関で、実習を行う。事前指導における倫理的な教育はしっかり行う。実習に関するスーパーヴィジョンおよびケース・カンファレンスを通じた丁寧な指導を行うことにより、院生の理解を深める。

4. 研究指導

実証的、論理的な研究を進めるため、テーマの選定や実証方法・分析方法の選択、論文構成や内容等に関して、指導教員が綿密な個別指導を行う。また、中間発表会・最終報告会等により集団指導を行う。両領域とも研究指導の中で研究倫理を丁寧に学ぶ。

5. 特色ある教育

臨床心理学領域では、臨床心理学領域以外の多様なカリキュラムを設置し、心理学全般に関する幅広い視点での学修が可能である。また、多彩な実習先を設定しているため、心理臨床の実践力が身につく。心理行動科学領域では、認知心理学と社会心理学を中心とした高度な知識と分析力の修得が可能である。

6. キャリア教育

学内・学外の機関等で実習・調査を行う場合、事前に日本臨床心理士会の倫理綱領および日本心理学会倫理規程に基づく倫理や各機関の職務規程についてのガイダンスを実施する。大学院修了後も外部実習・調査についてのレポート作成・報告および研究論文作成などに際して、守秘義務と個人情報保護に関する指導を行う。

各種学会への入会と参加を推奨している。臨床心理学領域では日本心理臨床学会、心理行動科学領域では日本心理学会、への入会および学会活動を勧めている。

臨床心理学領域では、公認心理師および臨床心理士受験のサポートを行う。

7. 学生への教育支援

研究・実習を円滑に行うために、情報・研究機器および心理検査器具を多数用意する。また体験・実践的な学びを深めることのために、実習・演習科目ではグループ活動を含めたアクティブラーニングを積極的に取り入れる。また公認心理師・臨床心理士資格に関する情報提供をし、個別サポートや授業外講習会を行う。

【学修成果の評価の在り方】

受け身の学修ではない学生の主体的な課題解決への取り組みを重視する。取り組んだ課題について、テーマ選択から結果の分析・検証に関してのまとめ方を評価する。その際、レポートそのもの、およびプレゼンテーション・討論能力等を総合的に評価する。

人文科学研究科 教育学専攻

◎カリキュラム・ポリシー

【教育課程の編成】

教育学専攻では、「学び続ける教員」の養成のために、カリキュラムを「理論と実践の往還型カリキュラム」として編成するとともに、インクルーシブ教育システム構築指導法を実現できる専門的実践力の育成を図る。

【学修方法・学修過程】

・小学校教員としての使命感と責任感を持ち、教育実践を支える教育理念を確実にするため、教育思想、教育史に関する「特論」と「演習」の科目を配置する。

・国語教育、算数教育を中心とした教科教育、道徳教育、特別支援教育においては、「理論と方法」に関する科目を配置して、児童の認知発達や精神発達の視点から教育内容の分析を行い、理論と実践を架橋する手法を習得する。

・「学び続ける教員」としての資質能力の育成を目指して、「実践法」に関する演習科目「実践演習」を配置する。この科目では、実際の教育現場で実践的・実証的な研究を実施できるよう、地域の小学校、特別支援学校等との連携により教職実践交流を実施する。

・インクルーシブ教育の実現に向けて教育課程を構造的に編成する。すなわち、特別支援教育に関する「理論と方法」、「実践法」及び「実践法」をコアとして、その周囲に、教科教育、道徳教育、学校経営（学級経営）の各科目を位置付け、さらにその周囲に、教育思想、教育史、発達心理学、学校カウンセリングの各科目を位置付けることにより、各科目の包含関係と科目の特徴、役割等を明確にして、専攻としての教育課程全体を関連付けて構造化する。

・インクルーシブ教育の推進において養成される学校経営、学級経営、学習指導法等の教育実践力、教育専門性の一層の向上のために、地域の小学校及び特別支援学校等関係学校間の連携、特別支援学級指導者、通級指導者との連携、地域教育センター・教育委員会等との連携を通して、教職実践交流を図る「特別支援教育実践法」、「特別支援教育実践演習Ⅰ」、「同Ⅱ」を設置する。

特色ある教育

教育委員会の協力により、地域の小学校の通常学級、特別支援学級、特別支援学校との教職実践交流を実施する。

我孫子市特別支援教育ネットワークの利用を通して、子ども発達センター（幼稚園児等対象）、福祉・医療の専門機関等の多様な機関と連携して学修し包括的職能力を習得する。

【学修成果の評価の在り方】

GPAによる成績評価を運用し、適切な評価を行う。

各学生の学修の展開と成果を学修ポートフォリオによって評価する。

実習の記録などを通じて、学生の主体的な学修と協働の態度を養い、評価する。

ルーブリックにより、基礎的な学力、思考力、主体的な協働を評価する。

人文科学研究科 比較文化専攻

◎カリキュラム・ポリシー

<比較文化専攻 博士前期課程>

【教育課程の編成】

比較文化専攻は、地域文化研究、社会・文化コミュニケーション、女性学の3分野からなり、学際的知見を身につけ、修士論文を完成できるようカリキュラムを編成している。

1. 地域文化研究分野では、日本、アジア、欧米等の諸地域に関する歴史・文化・地理等の高度な専門知識や方法論を習得するための科目を配置している。
2. 社会・文化コミュニケーション分野では、宗教、言語、教育、民俗、地域活動に関する高度な専門知識や方法論を習得するための科目を配置している。
3. 女性学分野では、ジェンダーにおける歴史、教育、批評に関する高度な専門知識や方法論を習得するための科目を配置している。
4. 専門分野の資料の読み方、調査方法、論文の書き方等を習得できる基礎科目を配置している。

【学修方法・学修過程】

1. 地域文化研究分野、社会・文化コミュニケーション分野、女性学分野から科目を横断的に履修できる。
2. 基礎科目によって、専門分野の資料の読み方、調査方法、論文の書き方を習得する。
3. 指導主任教員からの研究指導に加え、年に2回、研究発表会で研究成果を口頭で発表し、他の教員、学生から助言を得る。
4. 学修の集大成として、専門的な視点から修士論文を完成させる。

【学修成果の評価】

GPAによる成績評価を運用し、適切な評価を行う。また、論文作成、研究発表会での発表を通じて、学生の主体的な学修と協働の態度を養い、評価する。

<比較文化専攻 博士後期課程>

【教育課程の編成】

比較文化専攻は、地域文化研究、社会・文化コミュニケーション、女性学の3分野からなり、高度に学際的かつ独自性のある視点から研究を行い、博士論文を完成できるようカリキュラムを編成している。

【学修方法・学修過程】

1. 地域文化研究分野、社会・文化コミュニケーション分野、女性学分野から科目を横断的に履修できる。
2. 長期研究計画書作成し、指導主任教員及び他の教員からの指導・助言を得ながら、研究成果を年2回、研究成果発表会で口頭発表し、他の学生や教員から講評を得る。
3. 研究成果を『川村学園女子大学大学院研究年報』に1編以上掲載する。さらに査読付の学術研究誌に2編以上論文を掲載する。
4. 学修の集大成として博士論文を完成する。

【学修成果の評価】

GPAによる成績評価を運用し、適切な評価を行う。また、論文作成、研究成果発表会での発表を通じて、学生の主体的な学修と協働の態度を養い、評価する。